ISSN 0387-7280

Memories of 'Places'

The Relation between Text and Space

〈場所〉の記憶

—テクストと空間—

第35回　国際日本文学研究集会会議録

PROCEEDINGS OF THE 35th INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE

Tokyo, 26th ～ 27th, Nov. 2011

人間文化研究機構
国文学研究資料館

NATIONAL INSTITUTE OF JAPANESE LITERATURE
NATIONAL INSTITUTES FOR THE HUMANITIES

第 35 回国際日本文学研究集会会議録

2012 年 3 月 31 日発行

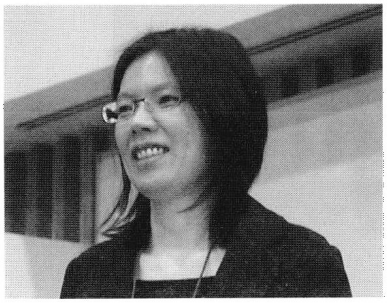
編集兼発行者
人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
電話　050-5533-2910
FAX　042-526-8604
URL　http://www.nijl.ac.jp/

印刷所
三鈴印刷
東京都千代田区神田神保町 2-32-1
電話　03-5276-0811

第１セッション

司会　渡辺　憲司 氏

粂　汐里 氏



蔡　佩青 氏

ポスターセッション

第３セッション

司会　青田　寿美 氏

徐　忍宇 氏

岩田　陽子 氏

Keith Vincent 氏

開会挨拶

今西　祐一郎 館長

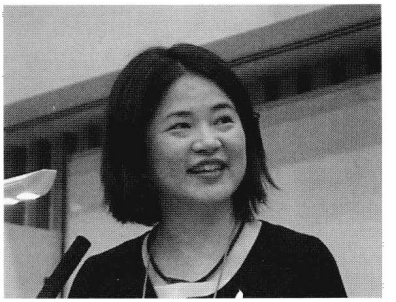
公開講演

崔　京国 氏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第２セッション

司会　戸松　泉 氏



廖　秀娟 氏

林　淑丹 氏

久保田　裕子 氏

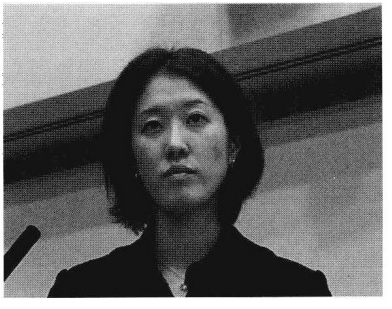
ショートセッション

司会　谷川　惠一 氏

司会　横井　孝 氏

第４セッション

司会　小嶋　菜温子 氏

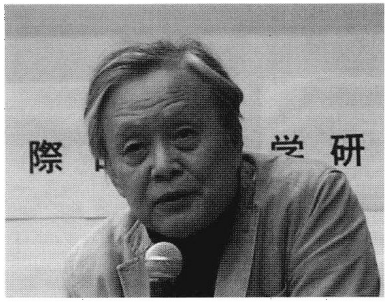


丹羽　みさと 氏

園山　千里 氏

赤澤　真理 氏

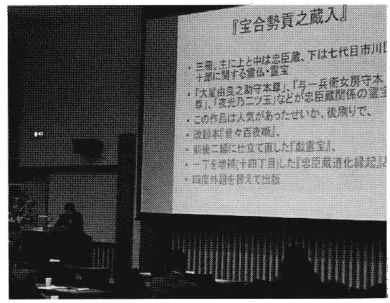
総括



武井　協三 氏

レセプション

会場風景



目　次

講　演

江戸時代における「展示型見立て」　崔　京国（チェ　キョンクック）…… 001
——開帳を模倣したイメージの展覧会——

研究発表

藤沢と『小栗判官』　粂　汐里（クメ　シオリ）…… 033
——長生院における享受と再生——

『西行物語』の方法　蔡　佩青（サイ　ハイセイ）…… 049
——東海道を歩む西行——

庄司総一「月來香」論　廖　秀娟（リョウ　シュウケン）…… 067
——病院、産婆、〈1941〉の台湾——

青い鳥の哀歌　林　淑丹（リン　シュクタン）…… 079
——澁澤龍彦『画美人』論——

太平洋戦争前後におけるタイ表象イメージの変容と接合
久保田裕子（クボタユウコ）…… 087

〈ユートピア〉という場所　徐　忍宇（ソ　イヌ）…… 115
——村上春樹の小説における「あちら側」——

津村節子が描く八丈島　岩田陽子（イワタヨウコ）…… 127
——「黒い潮」創作ノートの検証——

失われた欲望を求めて—『仮面の告白』におけるホモソーシャル・ナラティブ—
Keith Vincent（キース　ヴィンセント）…… 137

岡本綺堂の戯曲「お七」と本郷座　丹羽みさと（ニワミサト）…… 157

『落窪物語』の和歌—法華八講との関連から—　園山千里（ソノヤマセンリ）…… 165

王朝における歌合の空間　赤澤真理（アカザワマリ）…… 177
——村上朝天徳四年内裏歌合を受けとめた後冷泉朝期の歌合——

ショートセッション要旨 …… 191

ポスターセッション題目 …… 205

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

総括　武井協三（タケイ キョウゾウ） …… 207

英文要旨（研究発表） …… 211

英文題目（ショートセッション、ポスターセッション） …… 227

執筆者紹介 …… 229

開催までの経過 …… 232

第35回国際日本文学研究集会プログラム …… 233

参加者名簿 …… 237

国際日本文学研究集会委員会委員名簿 …… 246

講　演

江戸時代における「展示型見立て」

――開帳を模倣したイメージの展覧会――

崔（チェ）　京国（キョンクック）

はじめに

今回の日本文学研究集会のテーマは「〈場所〉の記憶――テキストと空間――」です。今から私が話すのは、開帳とそれをパロディした見世物やいわゆる見立てた戯作についてです。

開帳は江戸の人々の生活において重要な部分を占めていました。都市で行われた開帳に大勢の人が集まり、またそれを目当てに近くの広場で見世物が開かれました。そのような雰囲気の中から開帳をパロディーした見世物「とんだ霊宝」「おどけ開帳」が現れました。「とんだ霊宝」「おどけ開帳」は「見立て」が実際見世物として大衆の前で行われた点が興味深いのです。それが大当りをとっているので、「見立て」が木戸銭を払ってまで見る価値があったということになります。

この現象が見世物に終わらず、戯作・浮世絵などにも描かれました。江戸戯作の中でも黄表紙にこのような見立ての表現が多く見られます[①]。例を見ると『開帳』[②]（図1）のように、題目が書かれた紙を貼って霊宝を展示し、観客を前に杖を持ってこの霊宝が霊験のあるものだと説明してする人（僧侶、あるいは裃姿の人）がいます。それを見ている人々は手を集めて「ありがたや、かたじきなや」と霊宝の利益を感謝している場面が描かれています。

このように霊宝（展示物）を観客に見せて口上によって説明するという「霊宝」「観客」「口上」の三つの要素を持つ見立てを「展示型見立て」と呼びたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

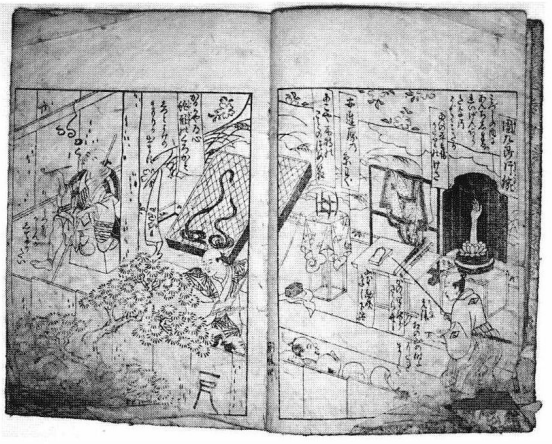


図 1

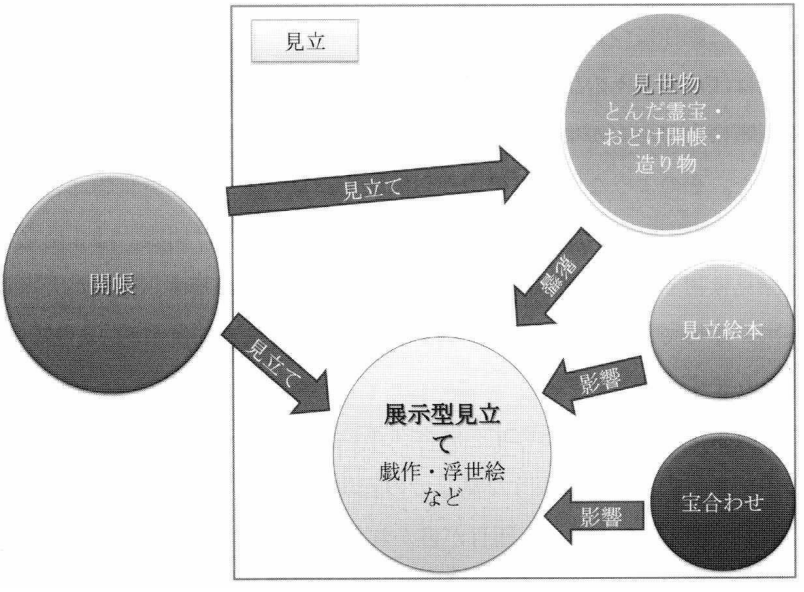


表 1

です。

「展示型見立て」においてなんの変哲もないものを宝として説明する方法は、当時の狂歌師たちの集まりから端を発した「宝合わせ」と類似しており、作り

方は『絵本見立百化鳥』（漕川小舟、宝暦5〈1755〉年）から始まる「見立絵本」からも影響を受けています。これらを関係図にすると次のようになります（表1）。

これから一つ一つ見ていきたいと思います。

とんだ霊宝

開帳が行われた寺を一歩踏み出すとそこは盛り場でした。『嵯峨霊仏開帳志』[3]（図2）に描かれた西蓮寺の前景を見ると、寺の前には店がずらっと並んでいます。

この開帳と見世物との関係は猿猴庵の記録以外にもよく見られることで、開帳を開く側としても見世物が開帳のにぎわいを支えたにちがいありません。考えてみると開帳も一種の見世物であり、その見世物どうしが博覧会のようにひとつの場所で大規模に開かれるのも効果があったのでしょう。江戸で一番これにふさわしいのが、宿寺としての回向院と両国広小路との関係です。この両国

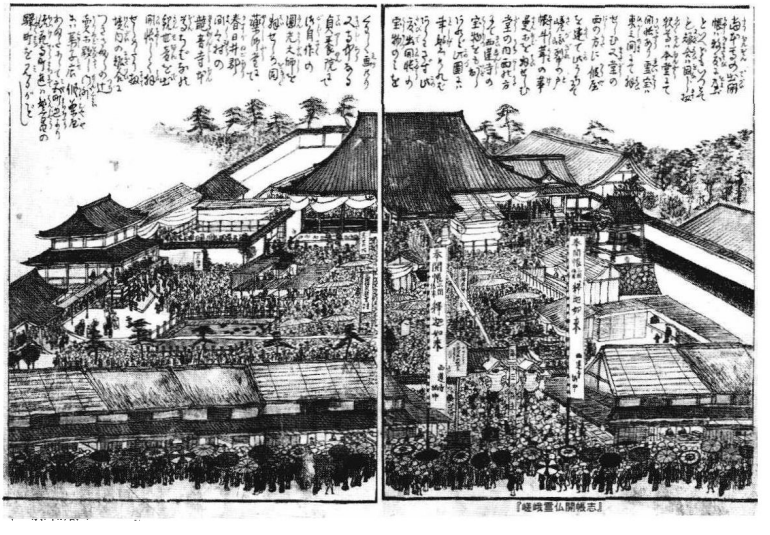


図2

記録	目録	縁起	黄表紙
• 『半日閑話』 • 『宴遊日記』 • 『燕石雑志』 • 『武江年表』 • 『鳩渓遺事』 • 『続飛鳥川』 • 『宝暦現来集』 • など	• 「開帳仏細工物　とんだれいほう」 目録材料・作り方	• 『三ヶ津伝来開帳冨多霊宝略縁記』 略縁起のパロディ	• 『三宝利生初竹』 当時の流行もの • 『龍都四国噂』 作品に応用

表2

広小路に安永六年、開帳を見立てた「とんだ霊宝」の見世物が開かれました。

安永六〈1777〉年両国広小路の鯰橋源三郎考案のとんだ霊宝はただちに江戸の評判物になり、多くの記録に載せられています。当時の状況を伝える史料は、延広真治「烏亭焉馬年譜考証（その一)―未定稿―」④に『半日閑話』、「烏亭焉馬年譜（二)」⑤には、『鳩渓遺事』『武江年表』、比留間尚『江戸の開帳』」⑥には『続飛鳥川』『宝暦現来集』『燕石雑志』などが挙げられています。また、『宴遊日記』があります。それに、広告として作られた「開帳仏細工物　とんだれいほう」、「とんだ霊宝」の会場で売られた七丁仕立ての本『三ヶ津伝来開帳冨多霊宝略縁記』、黄表紙『観音開帳　三宝利生初竹』（米山鼎峨作、鳥居清経画、安永六刊)、『龍都四国噂』（朋誠喜三二作、安永九〈1780〉年刊）があります。これを表にすると次のようです（表2)。

「とんだ霊宝」の開催期間

ここでまず、問題となるのが「とんだ霊宝」の開催期間です。朝倉無声『見世物研究』⑦には安永六年春から安永七年春としています。上記の記録からその期間を検証してみましょう。「とんだ霊宝」が行われた年を安永六年とするのと安永七年とする二種類と天明五年とする『宝暦現来集』があります。記録

は次のようです。

○とんだ霊宝

先月頃より両国橋広小路にてとんだ霊宝のみせ物大流行す。

細工物宝物目録　　細工人　鯰橋源三郎

古沢甚平

三尊仏

尊体飛魚、頭くしがい、後光ひだら、後光仏とこぶしの中にごまめのあだま、台座吸物わん。

不動明王

頭はさゞひ、頭はさけのあだま、手足体ともさけの塩引、御衣はびだこ、けさはこんぶ、剣はさしみ庖丁、ばくの絹はつるしなは、かゑんはかまくらゑび、岩座はさざひ、あわび。

役行者

頭手足とも干大こん、御衣わかめ、ひげはところの毛、御袈裟かぶり物はかんぴやう、しやくぜうはするめの足、あしだは氷こんにやく、岩はからざけ。

後　鬼

頭よりはら迄かまがしら、手足はきす、こしまきはしゐだけ、おびはかんてん。

前　鬼

かまくらゑび、こしまきは椎だけ、よきはかいじやくし、だいはからざけ。

右の外しげゝれば略す。

目録みせ物場にて是をうる　開帳飛だ霊宝略縁起也焉馬述、本所相生丁大工和助事也

右、両国に三ケ所、山下に二ケ所出来る。(『半日閑話』⑧)

○両国へ行、とんだ霊宝と幟出したる見せ物を見る、人叢分かたく木戸込合ふ、干魚・貝物等にて三尊弥陀・不動・役行者・鷹・龍・虎等を作り、細工

趣向感ずるに堪えたり、橋を渡り廻向院へ行、備中千体弥陀開帳の幟を立、南側に仏像あまた開帳　（柳沢信鴻記『宴遊日記』[9] 安永六年（1777）四月六日記）

○安永七年の夏の頃、信濃なる善光寺の阿弥陀如来、これも回向院にてをがまれ給ひけり。近在近郷いへばさらなり。彼此なるわかきものども老いたるものども、あさまだきよりくるゝまでみな大念仏して、参る事いと〳〵夥しなんどいふべうもあらす。両国橋のあなたこなたに見せ物多く出けり。とんだ霊宝と名づけて乾魚乾物、何くれとなくとりあつめて仏をつくり、或は鳥獣の形を作りならべてみす。（『燕石雑誌』[10]）

○有馬呑空君千石語予（筆者注。鈴木白藤）昔年我本所に在し時大工烏亭焉馬来りて、我厩の明きたるを五日か内借れり小牛の黒きを牽来りて繋置きし、其所は、安永七年戊戌信濃善光寺開帳　于時開帳大いに行れて、飛んだ霊宝とて■（欠字）にて申を（本ノママ）作り鬼娘とて鬼の様なる娘を看物場に出す。草雙紙上るり本読本おとし咄物売不知数ヲ。予か十二次の時世也。（『鳩渓遺事』[11]）

○安永七年六月朔日「同日より閏七月十六日まで、回向院にて、信州善光寺弥陀如来開帳、此時開帳繁盛して諸人群をなす、暁七時頃より棹の先に提灯多くともしつれて、高声に念佛を唱へて参詣するもの多し、平賀鳩渓烏亭焉馬が求によりて工夫をなし、小き黒牛の脊に六字の名號をあらはし、見せものに出して利を得たりといふ。又鯰江源三郎・古沢甚平といふもの細工にて、飛ンだ霊宝と号し、あらぬ物を見立て、仏菩薩などの形に作りたる見せもの、鬼娘と云へる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ。庭云、此時鬼娘は、橋向にも似せもの出来て、是もはやる、飛んだ霊宝略縁起は焉馬述、このみせものはやりて、両国に三ケ所、山下にニケ所出来たり平賀源内が作、実生源氏金王桜といふ浄るりに、両国鬼娘のみせ物を作りたり、この開帳の朝参りは、頓に禁ぜられたり　（『武江年表』[12]）

○安永の始、両国に、とんだ霊宝といふ見世物を出し、殊の外の見物也、夫

より見世物追々多くなる（『続飛鳥川』[13]）

○天明五年、両国於二回向院一、嵯峨之釈迦開帳之節、両国にてとんだ霊宝と名附たる見世物出たりしが、さまべの品ものを以て、小道具或は乾物を以て形ちを作り、から鮭にて三尊の弥陀、三味線の胴糸ばち駒を以鎧兜之類、櫛笄墨筆きせる煙草入等、何品と云事なく、さまべの物を造り、其手際まことの正物と見え、扨々綺麗なる能き見世物珍敷物故、多分之利益有りと云へり、是よりしてさまべ造物致しけれども、最前のごとくに見物も入らず、さまで評判もなし、（『宝暦現来集』[14]）

これを表にすると次のようになります（表3）。

資　料	期　間	関連開帳	焉馬述略縁起（安永六年刊）
『半日閑話』	安永六年三月より		みせ物場にて是をうる
『宴遊日記』	安永六年四月六日観覧		
『燕石雑誌』	安永七年の夏	善光寺	
『武江年表』	安永七年六月	善光寺	記述有り
『鳩渓遺事』	安永七年	善光寺	
『続飛鳥川』	安永の始		
『宝暦現来集』	天明五年	嵯峨釈迦	

表3

現在知られている上記の七つの資料には「とんだ霊宝」がいつ終わったかについての記録がありません。今までの研究は安永七年春に終わったとする『見世物研究』に従い、安永七年夏の「とんだ霊宝」を記憶の間違いとしてきました。しかし、安永七年春に終わったとする決定的な記録がない以上、『燕石雑誌』、『武江年表』、『鳩渓遺事』の三つの資料が間違いだとしてはいけないと思います。安永六年三月二十日から始まって五月十日まで行われた浅草寺の観音開帳に当て込んで開催[15]し、大当りを取ったので翌年六月朔から六十日間行われた善光寺開帳に合わせて行われたとみるのが妥当でしょう。

さらに、天明五年嵯峨釈迦開帳の時に「とんだ霊宝」が行われたとする『宝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com